

多文化介護・社会福祉海外研修報告

趙敏廷* 原野かおり*

要旨 本研修は、韓国における社会福祉・高齢者福祉の現状及び日本との違いを学ぶとともに、言葉の壁を超えた国際交流を通じて、主体的に考え、実行することの意義や今後自身の専門知識をどう活かしていくかを広い視野をもって考えるきっかけとなることを目的として企画した。保健福祉学科の学生6名と引率教員2名で韓国を訪問し、研修を行った。研修のふり返りから得られた成果として、「新たな知識につながる異文化体験」「異文化交流・体験からのきづき」「さらなる異文化学習への動機付け」が確認できた。効果的な学習となるためには、事前準備のなかで学生の意見や希望を反映し、現地の関係者と綿密に打ち合わせをすることが必要であることが示唆された。

キーワード 異文化 介護福祉 海外研修 国際交流 教育効果

1. はじめに

グローバル化社会に対応できる人材育成が求められる今日、本学では語学力とコミュニケーション能力を身に付け、異文化を理解し尊重できる人材養成の一環として、語学文化研修・海外研修のほか、スタディツアーを企画運営し、学生の海外での異文化体験を積極的に推進している。また、保健福祉学科社会福祉学専攻では、「福祉的視点と方法に基づいて、すべての人々の自立と自己実現を支援し、健康と幸福の増進に寄与することのできる深い知識と豊かな人間性を兼ね備えた人材の育成」を目指し、学位授与の要件の中には「多様な文化や価値観を受け容れ、グローバルに活躍できる企画提案力、情報発信力を身に付ける」ことを掲げている⁽¹⁾。このような流れなかで平成25年度開講された「多文化介護論」は地域に根ざしながらも国際的な視野を拡げることが目的として設けられた科目であり、同年には学内の学びにとどまらず実際に多文化と触れ学ぶことを目的として「多文化介護・社会福祉研修」を企画し、海外研修を実施した。

今回の研修は、これらの実績を踏まえて、社会福祉・高齢者福祉に特化した学生の海外研修であり、国際交流を通じて、主体的に考え、実行することの意義や今後自身の専門知識をどう活かしていくかを広い視野をもって考えるきっかけとなることを目的

としている。本研修は、平成30年度国際交流活動助成を受け、平成30年6月23日（土）から6月28日（木）までの6日間、韓国のソウル市及び天安市で行われた。保健福祉学科社会福祉学専攻の学生6名（1年生1名と4年生5名）が参加し、引率者として大学教員2名が同行した。

2. 研修の概要

多文化をふまえた介護・社会福祉への理解を深め、主体的に学ぶための研修プログラムとして、以下の内容を企画・実施した。1日目は、今回の研修プログラムについて学生と打ち合わせを行った。学生が自ら考えている報告内容や発表の準備状況について最終確認を行い、必要な物品を現地で手配した。2日目は、ソウルグローバル文化センターを訪問した。伝統衣装の試着、健康茶の試飲、韓紙工芸などを体験し、韓国の衣食住文化に触れ、歴史や文化に触れることの意義について学ぶ機会となった。3日目は、社会福祉専攻の教育課程がある白石大学校を訪問した。「日韓老人福祉制度」をテーマに両国の学生がそれぞれ報告し、意見交換を行った。また、学生主体で運営されている国際サークル活動のメンバーとの交流を行った。その後は、白石シルバーセンター、天安市健康家庭支援センターを視察し、それぞれの機関で展開している社会福祉事業に

* 岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科

〒719-1197岡山県総社市窪木111

ついて説明を受け、子どもから高齢者にいたるまで地域の特徴に合わせたニーズに対応しているサービスについて具体的に学ぶ機会となった。4日目は、高齢者福祉施設（入所型）東明老人福祉センターを訪問した。施設見学とともに、研修に参加した本学の学生が入居者の前で韓国語を駆使した劇を披露し、外国人高齢者とふれあう機会に恵まれた。5日目は韓国の準政府機関である韓国保健福祉人材開発院ソウル教育センターを訪問した。教育関連施設の見学および日本と韓国の保健福祉人材育成の体系に関する講義を受け、両国の相違点と共通点などについて具体的に学ぶ機会となった。

3. 研修の内容

（1）ソウルグローバル文化体験センター

①所在地

5th Floor, M-Plaza Myeong-dong 8gil 27, Jung-gu seoul, South Korea.

②施設の概要

ソウルグローバル文化センターは、ソウルを訪問する外国人とソウル市民のグローバル文化交流の場を提供することを目的として、2009年3月に開館している。朝鮮民画や韓紙工芸などの体験を通じて、韓国の伝統文化を理解し、楽しめるサービスを提供している⁽²⁾。

③研修プログラムと成果

季節別、主菜・副菜などの食材や献立など韓国の食文化の展示物を鑑賞した。また、韓国のチマ・チョゴリなど伝統的な服装を試着したり、韓国の伝統工芸体験として韓紙で韓国の伝統靴を作成したり、電子化されたカルテの診断に応じて調合された韓国の茶を試飲した。韓国の様々な文化に触れ、体験することにより、自国文化と異なる新たな文化を具体的に知るとともに、それぞれの文化の背景について理解を深めた。

④研修参加者の様子



韓国伝統衣装のチマ・チョゴリを体験



韓紙を使った伝統靴の工作体験



韓国健康茶の試飲や香り袋の体験

（2）白石大学校

①所在地

76 Munam-ro, Dongnam-gu, Cheonan-si, Chungnam-do, South Korea.

②担当者

社会福祉学部老人福祉学科 学科長 キム・ウク 教授

社会福祉学部老人福祉学科 教授 ソ・ドンミン 教授

③研修プログラムと成果

白石大学校は、「キリスト大学のグローバルリーダー」を掲げ、1976年に設立された4年制私立大学である。「キリスト学部」「語文学部」「社会福祉学部」など12学部（大学院は7専攻）となっており、とりわけ「社会福祉学部」は「社会福祉学」「児童福祉学」「青少年学」「老人福祉学」「リハビリ福祉学」の5つの専攻に細分化されていることが特徴である⁽³⁾。

今回の研修では、白石大学校社会福祉学部学生が立ち上げた国際交流活動サークル「ハイハイ」の学生及び社会福祉学部学生との交流プログラムに参加した。「ハイハイ」代表学生は、サークルの目的や主な活動の内容について紹介があった。毎年日本を訪問し、高齢者福祉施設や大学との交流を通じて、

両国の福祉・文化に対する理解を深めている。また、海外から白石大学校への訪問がある場合、「ハイハイ」サークルの学生が中心となって交流プログラムを企画・実施しているとのことであった。サークルの指導教員は、「海外研修に参加するのは任意であり、教員は学生に研修の日程、宿泊先、集合日時・場所などを学生に提示する。宿泊ホテルや航空券などは原則学生が各自で手配することとなり、学生同士で情報を協力しながら準備をする。」と述べていた。

次に、「日本と韓国の高齢者福祉制度の現状と課題」をテーマとした学生間の発表が行われた。両国の学生たちは、グーグルなどを活用して韓国語・日本語の資料を作成し、発表した。意見交換においては、通訳ソフトなどを活用しながら、学生同士で活発に意見を交わしていた。

④研修参加者の様子



日本語と韓国語で岡山県立大学を紹介



お互いの国ならではのお土産を交換



学生間の意見交換と交流



大学の敷地内に併設されている付属美術館を見学



各々の思い出を詩に残し博物館に掲示



白石大学の広大な敷地をバックに記念撮影

（３）白石シルバーセンター

①所在地

9th Floor, Baekseok University Bd, 129-12, Dongseode-ro, Seobuk-gu, Cheonan, Chungnam, South Korea.

②担当者

センター長ソ・ドンミン氏 ほか

③研修プログラムと成果

白石大学校付属施設として、2008年に開設している。主な事業は①教育及び文化事業、②保健及び福祉サービス、③研究及び開発事業などがあり、それぞれの事業の概要について説明を受けた。地域のボランティア養成機関としての役割を担っているほか、施設見学においては、とくに「生涯体験館」が設けられており、高齢・障害のある方が自立した生活を送るための環境整備として一般家庭を想定したキッチン、浴室、居室の設備とともに様々な福祉用具が展示されていた。日本でなじみの福祉用具がある一方、見慣れない福祉用具もあり、研修に参加した学生たちは興味深い様子が見受けられた。

④研修参加者の様子



当センターの事業について説明を受ける学生



初めて見る福祉用具に興味津々

（４）天安市健康家庭支援センター

①所在地

11th Floor, Baekseok University Bd, 129-12, Dongseode-ro, Seobuk-gu, Cheonan, Chungnam, Korea.

②担当者

事務局長 スン・ジョンチャン氏 ほか

③研修プログラムと成果

健康家庭支援センターは韓国女性家族部の傘下機関であり、本センターは2005年天安市が白石大学校に運営委託して開所している⁽⁴⁾。主な事業は①家族教育事業・家族相談事業、②家族文化事業・家族トルボルナヌム事業、③家族プマシ・共同育児ナヌムト、④子どもトルボム事業、⑤危機支援・未婚母親子支援、⑥一人親購買賃貸住宅事業・ボランティアなどがあり、それぞれの事業の概要について説明を受けた。とくに、地域における育児支援に注力していることが特徴で、地域の子育て親同士のネットワーク構築や交流の場を提供しているほか、急な保育サービス依頼に対応できる体制が整えられていることが特徴であった。学生からは韓国の取り組みから学ぶべき点が多いと発言がみられるなど日本の少子化対策として育児支援の重要性を再認識している様子が窺えた。

④研修参加者の様子



ウェルカムボード「白石大学、岡山県立大学のみなさん、ようこそ！！」



センター長より地域住民を対象としたサービスについて説明を受ける学生

（５）東明老人福祉センター

①所在地

15 Bongcheon-ro 23ra-gil, Gwanak-gu, Seoul, Korea.

②担当者

園長 キム・ビョンハン氏 ほか

③研修プログラムと成果

1950年ハンセン病未感染児を受け入れるための保育施設として「東明学園」を開設、その後社会福祉法人東明園を設立、2002年以降は老人福祉センター、老人専門療養施設、グループホームなど高齢者福祉事業とともに、児童福祉センター、保育サービスなど児童福祉事業も展開している⁽⁵⁾。キム園長からは、韓国の高齢者福祉制度及び長期療養保険制度について講義を受けたあと、当園の高齢者福祉施設を中心に事業の概要について説明を受けた。また、研修に参加した学生たちが韓国語で劇「桃太郎」を高齢者の前で披露し、入所されている方々との交流を図った。笑顔で拍手を送られる高齢者の様子から、公演終了後は「頑張ってよかった」「伝わってよかった」と活動をふり返り、達成感を感じている様子が窺えた。言葉や文化は異なっている「伝えたい気持ち」や「伝えるための努力」の重要性を実感しているように思われた。

④研修参加者の様子



韓国における高齢社会の現状、施設の仕組みについて説明を受ける学生



韓国語で「桃太郎」の劇に挑戦



台本から衣装、小道具まで学生自身で準備した力作の数々



施設の入口で施設長と記念撮影

（６）韓国保健福祉人力開発院 (Korea Human Resource Development Institute for Health & Welfare) ソウル教育センター

①所在地

7thFl, Seoul City Tower, 110, Huam-ro, Jung-gu, Seoul, Korea.

②担当者

社会福祉教育本部教育総括部 部長 カン・ドンフン氏 ほか

③研修プログラムと成果

韓国保健福祉人力開発院は、保健福祉に関する教育訓練等の業務を担い、保健福祉関連業務に従事する者の専門性を高め、保健福祉領域の発展につなげることで国民のQOLの向上に貢献することを目的としており、2004年財団法人として国立保健院から設立された。2007年から特殊法人、2013年から準政府機関として指定されている⁽⁶⁾。主な事業は①保健福祉領域の専門家及び教育訓練講義養成、②保健福祉領域の訓練プログラム研究開発・普及及び管理、③保健福祉関連統計作成、刊行物及び資格関連力量開発事業、④保健福祉領域の人材開発に関する研究及び国際協力事業である。

社会福祉教育本部教育総括部のヨン主任より韓国

保健福祉人力開発院の主な事業の概要について説明を受けたあとは、「韓国の福祉政策と福祉教育の現状」をテーマとする社会福祉教育本部教育総括部のカン部長による講義と「日本における福祉人材養成体系－介護福祉士の養成課程を中心に－」をテーマとする岡山県立大学原野かおり准教授による講義が行われた。韓国保健福祉人力開発院の職員の方も数人出席され、質疑応答と意見交換が活発になされた。

見学では、「社会福祉専門職」のほか、「社会服務要員」に対する研修などに使用される研修室に案内してもらい、韓国の特徴的な福祉人材育成の現状を知ることができた。

④研修参加者の様子



報告者の「福祉人材養成の現状と課題」に耳を傾ける学生



韓国語で自己紹介をする学生



センター内の研修用会場を視察中、始めて見る設備に興味津々の学生

4. 参加学生のレポート報告書からみる研修の成果

(1) 方法と倫理的配慮

今回の研修が学生にどのような教育効果をもたらしたのかについて明らかにし、今後の多文化介護・社会福祉研修への示唆を得ることを目的とし、2018年度多文化介護・社会福祉研修参加者を対象に、研修終了後「本研修の内容に関する感想や意見」について自記式・自由記載のレポート課題を求めた。報告書は、約1週間後個別に回収した。回収した学生のレポート報告書のデータをもとに、内容分析を行った。

倫理的配慮として、レポート課題は、報告書として公表することを目的としていること、目的以外には使用しないこと、使用の際は個人を特定できないようデータ処理して用いることを口頭で説明した。

(2) 結果及び考察

参加学生のレポート課題はコード化を行い、さらに抽象化作業を進め、コードからカテゴリーを生成した。結果、【様々な場面での印象的な異文化体験】【韓国の少子高齢化と福祉サービス】【文化を尊重した福祉サービス】【韓国介護福祉人材の特徴】【はじめてみる福祉用具】【高齢者との異文化交流から得られる達成感】【言葉に頼らないコミュニケーションの重要性】【異文化体験からとらえる日本の文化への気づき】【福祉の観点からとらえる異文化体験からの気づき】【異文化探求への意欲】【外国語習得への意欲】といった11のサブカテゴリーと『新たな知識につながる異文化体験』『異文化交流・体験からの気づき』『さらなる異文化学習への動機付け』といったカ3つのカテゴリーであった(表1)。

本研修は、韓国における社会福祉・高齢者福祉の現状及び日本との違いを学ぶとともに、言葉の壁を超えた国際交流を通じて、主体的に考え、実行することの意義や今後自身の専門知識をどう活かしていくかを広い視野をもって考えるきっかけとなることを目的として企画・実施された。研修では、韓国の文化体験を通じて、韓国の食衣住文化に触れ、体験することにより、自国文化と異なる新たな文化を具体的に知るとともに、それぞれの文化の背景について理解を深めることができていた。国際交流活動サークル「ハイハイ」など社会福祉学部学生との交流を通じて、外国語習得への意欲を刺激するほか、様々なコミュニケーションツールを駆使すれば、意思疎通を図ることができるという自信につながって

表1 海外研修のふり返りから得られた成果

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの一部
新たな知識につながる異文化体験	様々な場面での印象的な異文化体験 (9)	韓国と日本の文化的な違いを学ぶことができた。食事でのマナーや支払いに関することだけでなく、トイレの使用方法も異なることがわかった。
		一人ひとりの主体性が強く、他者に意見や気持ちをはっきりと伝えられる人が多い
		歩行者信号が青の時、残りの秒数をカウントダウンしてくれる
		トイレに紙を流してはいけないということに少し抵抗があった。
		韓国は日本に比べて高い建物が多く、道路も広かった。大陸にある国であることと、戦争と関係していることを知り、日本との大きな違いであると感じた。
		ソウル駅周辺にはホームレスの方々も多くいっしょり、都市部の中でも大きな所得格差、生活の差があることを知った。
	韓国の少子高齢化と福祉サービス (5)	韓国から学ぶことは多くあるが、福祉への考え方や国の特徴によって求められるサービス等が異なること、多様なニーズがあることを学ぶことができた。
		老人施策では、日本の介護保険法と似たところも見られたが、韓国では、自己負担が日本より多いことや、施設サービスも日本と似たものや、韓国にしかない老人余暇施設などの違いがあることを学んだ。特に余暇施設には力を入れており、サービスの充実を図っていることを学んだ。しかし、地域別の偏りや高齢者の貧困率や疎外・孤独があること、予防サービスの不足などの課題も残っていることを学んだ。
		「すべての家族が笑える天安」をスローガンとしており、育児支援に力を入れていました。
	文化を尊重した福祉サービス (1)	日本と比較して発展しているものとして、高齢者の雇用や、児童とその保護者に対する政策・取り組みが挙げられる。
		印象的だったことは、浴室に浴槽がなかったことである。韓国ではシャワー浴がほとんどであることから、施設でも湯船につかる日本の入浴とは異なり、シャワー浴が行われていることがわかった。利用者の生活文化を尊重した施設の設備をなっており、その人らしい介護の一つであるとわかった。
	韓国の介護福祉人材の特徴 (3)	韓国では成人男性に兵役の義務があるが、この社会服務要員は、保健や福祉など、公的な社会福祉施設で勤務することで兵役の免除を受けることができる。
		福祉服務要員の教育(福祉等)について施設を見学しながら説明してもらいました。日本には無い制度であり、大変興味深く話を聞いた。
		療養保護士の平均年齢が52.8歳であることに驚きましたが、ドルボム支援の一環として老人サポートしておりシルバー人材の活用を進めている印象を受けた。
異文化交流・体験からの気づき	はじめてみる福祉用具 (3)	韓国で使用されている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
		スライディングボードにスライドする座面がついており、利用者が移動しやすいようにされていた。このスライディングボードを利用することで、利用者も介護者も負担が小さくなるのではないかと考えられる。このような福祉用具は見ることがなかったため、新しい学びにつながった。
	高齢者との異文化交流から得られる達成感 (2)	福祉用具や住宅改修においても、スプーンの柄の部分が長く腕に巻きつけて固定できたり、食器棚自体が動くようになっていたり、新たな知見が得られた。
		韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
	言葉に頼らないコミュニケーションに重要性 (2)	スライディングボードにスライドする座面がついており、利用者が移動しやすいようにされていた。このスライディングボードを利用することで、利用者も介護者も負担が小さくなるのではないかと考えられる。このような福祉用具は見ることがなかったため、新しい学びにつながった。
		福祉用具や住宅改修においても、スプーンの柄の部分が長く腕に巻きつけて固定できたり、食器棚自体が動くようになっていたり、新たな知見が得られた。
	異文化体験からとらえる日本の文化への気づき (2)	韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
		スライディングボードにスライドする座面がついており、利用者が移動しやすいようにされていた。このスライディングボードを利用することで、利用者も介護者も負担が小さくなるのではないかと考えられる。このような福祉用具は見ることがなかったため、新しい学びにつながった。
	福祉の観点からとらえる異文化体験からの気づき (3)	韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
		スライディングボードにスライドする座面がついており、利用者が移動しやすいようにされていた。このスライディングボードを利用することで、利用者も介護者も負担が小さくなるのではないかと考えられる。このような福祉用具は見ることがなかったため、新しい学びにつながった。
さらなる異文化学習への動機付け	異文化探求への意欲 (1)	韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
	外国語習得への意欲 (2)	韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。
		韓国で使われている福祉用具は、基本的には日本のものと同じであったが、スプーンやフォークの自動が持ち手を太くしたり、ベルトがついているものではなく、腕に巻き付けて使用するものがあり、握力が弱い利用者にとって使用しやすいものであると感じられた。

いた。高齢者福祉施設、東明老人福祉センターでの劇公演を通じては、自分たちで発表の内容を考え、資料の作成と発表を行った経験が一定の達成感につながっていた。白石シルバーセンター、天安市健康家庭支援センター、保健福祉人力開発院での視察を通じて、韓国における社会福祉の現状と課題と対比しながら、これまで学んだ自国における社会福祉の現状と課題について見つめ直し、福祉専門職を目指す上で新たな視点を得ることができていた。また、さらなる異文化学習への動機付けにつながっていた。

以上から、今回の研修の目的はおおむね達成できたといえよう。短期間での研修のなかで、効果的な教育効果を得るためには綿密な準備が重要である。今回の研修では現地での研修に向けて研修プログラムに対する学生の希望を確認し、教員と学生が事前打ち合わせの中でともに検討を重ねていった。また学生が研修プログラムに自主的に参加するための場を確保するために、現地の関連機関・関連施設と事前に調整を図ったことが一定の成果につながったと考える。

5. おわりに

本研修での韓国の文化体験、大学訪問による学生間の交流、福祉施設での公演、保健福祉人材養成に関する意見交換などをふり返り、得られた気づきや今後の抱負などから本研修での成果を確認することができた。また、今年度の多文化介護論の講義では参加した学生の協力を得て、後輩の学生に成果の一部を報告する予定である。報告を受けた学生が海外研修に関心をもち、海外研修への参加を検討するきっかけとなることが期待できる。

今後の課題としては、海外研修を「多文化介護演習」のような授業の一環としての可能性を模索し、継続した海外研修の実施と効果的なプログラムを検討することによって、学生の国際交流活動を通じた学習支援をさらに進めていく必要がある。

参考文献

- (1) 岡山県立大学ホームページ
(<https://www.oka-pu.ac.jp>)
- (2) ソウルグローバル文化体験センターホームページ
(<https://www.seoulculturalcenter.com>)
- (3) 白石大学学校ホームページ
(https://www.bu.ac.kr/main_index.jsp)

- (4) 天安市健康家庭支援センターホームページ
(http://www.familynet.or.kr/fn_areacenter/main/index.do?ci_domain=cheonan)
- (5) 東明老人福祉センターホームページ
(<http://www.dmsenior.or.kr>)
- (6) 韓国保健福祉人力開発院ホームページ
(<https://www.kohi.or.kr>)

Report on multicultural care and social welfare training in South Korea

MINJEONG CHO*, KAORI HARANO*

**Department of Health and Welfare Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama, 719-1125, Japan.*

Abstract

In this training course, participants learned about the current situation of care and social welfare for older adults in South Korea and considered the differences with Japan's case. Working through the language barrier, the international exchange allowed participants to gain a broader perspective on how to re-conceptualize ways to better utilize their own expertise. Six students from the Department of Health and Welfare, along with two supervisory faculty members, visited South Korea and completed the training. As a result of the training, it was found that "cross-cultural experiences were linked to new knowledge", "students gained new perspectives on cross-cultural exchanges", and "there was even more increase in motivation for cross-cultural learning." To support effective learning in the future, it is recommended that as part of preparation before leaving, students should engage in self-reflection regarding their own opinions and expectations, and detailed preparations should be made with the local stakeholders.

Keywords : cross-cultural, care and social welfare , International training, International exchange, education effect